

経営者への活きた言葉

国民の意識転換で優れたリーダーが生まれる 中西輝政(京都大学大学院教授)

1. 伊藤博文しかり、明治の優れたリーダーたちは、いずれも、大震災が相次ぎ、外敵の侵略で国家滅亡を目の前にした国民がその幕末の危機をともに乗り越えようと、覚悟を決めて新しい時代に飛び込む中から生まれてきたのである。そういう時代の空気の中で生きてきた明治の人は、常に毅然きぜんとされ、いまの日本人とは違って、肝が据わった凜りんとした気風を漂わせていた。危機が国民を鍛えるのである。
2. 優れたリーダーというのは、そのように国民の意識が転換してからでなければ出てこない。リーダーを生み出す土壌である国民自体が変わらなければ、いくら求めても出てこないことを自覚すべきである。戦後の高度成長を経て豊かになった日本人は、いつしか「カネさえ、モノさえあれば幸せになる」と錯覚してしまっていた。何事も他人に頼ろうとする依存体質が染みついてしまった。
3. こうした日本という国の危うさを、この度の震災によって、自分たちが依って立つはずのものが一瞬のうちに崩壊してしまったことで、強く意識させられたはずである。我々はここで謙虚に頭を垂れ、己の小ささをもう一度見つめ直さなければならない。

(参考:「致知」2011年6月号)

経営者のための危機管理

海外輸送船の日本外し

1. 復興の重い足かせとなる福島第一原発事故。収束の見通しは立たず、その余波は拡大を続けている。「首都圏は放射能汚染で近づけない」。そんな風評が世界の「日本外し」を加速させている。「穀物輸入船が首都圏の港に入っていない。現場はパニック状態だ」。総合商社の輸送部門担当者は、今、口を揃えてそう言う。
2. 海外の船会社、とりわけドイツを中心として欧州系が今、首都圏近郊の海上を通ると放射能を浴びると考え、輸送を拒んだり、遠回りする分の運賃を求めるようになっている。輸送船の日本外しが長期化し、原料の買い付け価格も上がれば、「最終製品に転嫁される恐れもある」(原料メーカー)と危惧する声もある。

(参考:「週刊エコノミスト」:2011年 5月 3日・10日号)